

親と子の情緒体験の共有 (2)

青木紀久代

前回、親子の共有する情緒体験について、述べさせていただき、最後に子どもの傷つき体験の共有の難しさについて少し触れ、それを次につなげると結んだ。そこで、今回は、子どもの傷つきという少し、ネガティブな情緒体験と大人がどうつきあうかについて、考えてみることにしたい。

子どもの傷つきと回復力

乳幼児期の心の発達を、親子の相互作用場面を観察し、直接推論しようとした研究に、マラーらの分離—固体化研究^{註1}がある。一九七〇年代に行われたが、もともと精神分析的な理論背景を持つ研究であるために、彼らの研究はもっぱら臨床心理学の中で取り上げられてきた。故に発達心理学や保育場面では、馴染みの薄い研究であったかもしれない。

さて彼らの研究内容の重要性については、邦書においても他書^{註2}で多く論じられているので、参考にするにたたくこととして、ここでは一連の研究成果の一つと

して彼らが公表している、母子観察のビデオ記録について、触れてみよう。

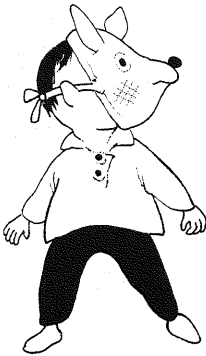
継続的な観察研究に参加しているのは、米国の中流階級のごく平均的な家庭環境を持つ親子たちである。一定期間、常設されたプレイルームで親子が継続的に参加することによって得られた膨大なビデオ記録を編集したのだが、一時間ほどのビデオに展開する乳幼児の発達過程は、自然な母子や父子のやりとりや子どもの表情をとらえており、ごくありふれた日常場面の一コマを映し出すことに成功している。

このビデオから私たちは、健全な子どもたちが、親子関係の連続的な体験を通して、やがて自分にとって大切な人物を心の中にとどめることによって、大切な人との分離の寂しさを乗り越え、自分を励ましつつ、さらなる個としての成長を遂げようとする心の発達過程を、実に鮮明に確認することができるのである。宇面を追っているだけではなかなか理解しにくいマラー理論も、このビデオを見ると、一挙に臨床的に身

近にとらえることができるようになる。

私も学生時代、この感動を味わって、今臨床心理学を学んでいる学生とそれを再び共有することになった。あらためて見直すと、日本での母子観察場面との違いが、気になり始めた。

例えば、親たちはほとんど椅子に座って話をしていて、乳児は床で遊んでいる。子どもをとらえるシーンでは親の膝下しか映っていないことが多い。新生児期の母子の見つめ合いや授乳の時の一体感などの心理的重要性を、いつも外国の研究を引き合いに出されながら教えられてきた私たちにしてみると、この構図は何とも奇妙なのである。より正確に言うと、こうした場



面を多く切り取ってくる、観察者側の意識に違和感を持つのである。

さらにビデオの中で子どもがちよつとしたはずみで転び、泣き出すシーンがあるが、子どもが自分で助けを求めて訴えにいくまで、親は椅子に座ったままでいる。

こうしたシーンについて、米国人の方々と素朴な意見交換をしたことがある。すると、「自分も子どもが泣いてもすぐには近づくかないで見守るだろう」とのことである。私がさらに「なぜ？」と問うと、彼女は「子どもの強さを信じているから」と答えた。「このくらいの痛みは、大丈夫。自分で回復できるわ」と。

日本人が、子どもの泣き声に対して反応性が高いことは、よく知られていることである。共感的な対応をするには、こちらが相手の痛みを感じ取らなければいけないが、泣き声によって、実際子どもが感じている以上の痛みを親が感じて、結果的に助けすぎるということになるらしい。こうなると、それは過剰な感受

性・共感性となり、結果的に子どもの自律を妨げることになりかねない。

概して私たちは、子どもを傷つきから守ろうとする。子どもが傷つかないように、傷つけないようにと、心を砕く。そして、ついに子どもが痛い思いをすると、親として守ってやれなかった自身を責めたり、罪悪感の打ち消しのために、逆にそのようなことに陥ってしまった子どもの不手際を叱ってしまったりするのである。

育児に一生懸命な親御さんたちの中には、こういう悪循環にはまってしまふ一群がある。育児がうまくいかない、子どもとの関係がうまく続かない、と自信をなくしている親御さんたちの多くが、実は、こちらが頭を下げたくなるほど子どもに献身されていることが多いのである。

子どもに対する親のあからさまな暴力や無関心をかばうつもりは毛頭ないが、子どもの傷つきに対する、回復力、自己治癒力を信じて待つことの大切さは、心

に留めておきたい。それがつまりは、「子どもを信じる」ことの重要な側面の一つなのである。

子どもの心の痛みを共有するために

もともと親が子どもの痛みをすべて取り除いてやることは不可能であるし、子どもの方でも傷つきから回復するために、せつせと自分なりの試みを行っているものである。

よくある例として、一歳十カ月になる女兒の事例を紹介しよう。

彼女は三カ月ほど前に、年子の弟ができた。お察しのように、自分の哺乳瓶やおむつも手放せないうちに、お姉さんになってしまった。彼女は、人並み程度の焼きもちを示し、わがままも言える、健康な普通の赤ん坊である。かつて自分の所有物であったものを弟が使うことに激しく抵抗し、泣きわめくときもある。また、弟が哺乳瓶をくわえているときには、自分も同じものをくわえて横になる。さらにあるときは、母親

が弟に授乳をしている間、横に座って、牛の顔をした自分の枕にミルクを与えてすごす。弟が生まれた事による喪失感、満たされない思い、という彼女の心の状態は容易に想像がつき、そういう自己の傷つきに対して、自分が赤ん坊になって満たされようとしたり、逆に母親の方に同一化して満たせうとしたりしながら、多様な方法で適応しようとする一面が見て取れる。

子どもの傷つきの原因を一番よく知っているのは、他ならぬ親であるが、弟がいるという現実をなしにすることはできない。

親のできる最善の対処は、娘の不安定な時期をじつと見守りながら、彼女が自分なりに乗り越えていくのを支えることしかない。見守っている最中には、理屈はどうであれ、弟を生んだある意味で加害者としての自分、というものに繰り返し揺さぶられ罪悪感がわく。この時、お父さん、お母さんが悪かったと娘に詫びてどうなるものでもない。

しかし、考えても仕方ない、とばかりに子どもの気

持ちのプロセスにつきあうことをやめてしまうと、自らの内側にわき上がった罪悪感に蓋をするのと一緒になり、子どもへの共感性や感受性を閉ざしてしまうことになるのであり、これは二次的にさらに子どもを傷つけることになってしまうであろう。

子どもが揺れるのに呼応して、親側の揺れを感じつつ見守る中で、子どもが安定を取り戻すことができたとき、親は子どもの成長や強さをあらためて認識し、信じる気持ちが強化されるのではないか。子どもにとっては、おそらく自分の傷つき体験を否定されないで見守ってもらえる、つまりは否定的な情緒体験を共有してもらえた、という体験となるであろう。

これはごく小さな事例であって、たいいていは、子どもの発達力や家族の健康さの中で自然と修復されるものであり、実際にはあつという間に通り返してしまふ、短期間のエピソードである。しかし前回述べたように、日常のちょっとした場面での親子の情緒共有が、その子どもの自己感の発達を育てる、という意味

で、この事例はそれを端的に示していると思われるのである。

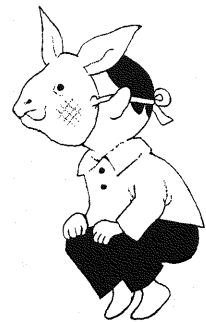
子どもの

「感じる力」を守るために

このようにしてみると、子どもの傷つき、痛みを共有しつつ見守ることの繰り返しを通して、子どもの中にある回復力、すなわち「強さ」が育ってくるようである。子どもの成長につれて、傷つきの原因が、家庭の外にある場合が増えるが、子どもの力を信じることで、さらなる内面的な成長を促す。

もつとも、たわいのない子ども同士のトラブルに、親たちの幼稚な被害者意識や、対人不信がからみついて、やっかいが生じることが多い、というのも、世の常であろうか。

相談室に来談される子どもの中には、問題は複数人



の対人関係の中で生じているのに、その責任を仮にとらされた、相対的力関係においての弱者と言えるような状況にはめ込まれているものがある。子どもの問題を巡ってそのご家族の受けた心的な外傷があまりに大きく、心理相談の枠ではとても解決できないような事態に遭遇することもある。

残念ながら、子どもの問題より、大人の対人関係の問題、といえる相談はあまたあるのが実状なのである。

……おまけに、相談者としてではなく、ひとたび母親としての私に戻れば、自分にも、愚痴をこぼしたい話は、数え切れないほどあるのだから、我ながらやるせない限りである。

そうであるから、これまでの議論は、傷つきの程度問題がクリアされていることが大前提だということ、念のため申し添えておく。

毎日毎日自分たち家族にふりかかる、この手の火の

粉を払いつつ、まずは、子どもの小さな傷つきは、それ自体は失敗ではなく、むしろ強さを身につけるきっかけの体験なのだ、あらためて自身に言い聞かせたものである。

長い目で見れば、このような関わりは、その子どもが相手の痛みを感じとれる力となり、「強さ」と同時に「優しさ」をも育てるはずであろうから。

(お茶の水女子大学)

註

1 M・S・マラー他著 高橋雅士・織田正美・浜畑 紀訳

『乳幼児の心理的誕生』黎明書房 一九八一年

2 例えば 小此木啓吾著『現代精神分析の基礎理論』弘文堂

一九八一年 P.179—195